

五百羅漢図

江戸時代後期の絵師、狩野一信（1816－1863）による全 100 幅の見事な掛け軸は、増上寺の宝物展示室にて入れ替えて展示されています。狩野は敬虔な仏教徒で、仏教絵画で名を馳せていました。1854 年、狩野は増上寺の子院である源興院の住職から、仏陀の弟子の中でも最も献身的で優れた業績を残した五百羅漢の日々の様子を描いた絵画の制作を依頼されました。

完成した『五百羅漢図』は、数々の煩惱とそれらを克服する方法を描いています。掛け軸のいくつかには、羅漢の沐浴や学習、剃髪などの日常の風景が描かれています。また、羅漢が不思議な姿をした「靈獣」と一緒にいる様子や、洪水、地震、灼熱や極寒など、不信心なものを待っている地獄の恐ろしい情景の上に羅漢が浮かんでいる様子を描いたものもあります。一信は狩野派という画派の一員です。狩野派は漢画の墨と筆遣いをより色彩豊かで装飾的な日本の画風と融合させました。狩野派の光と影の表現には西洋画の明暗法の影響が伺えます。狩野一信の異色かつ大胆な作風は、版画家の葛飾北斎（1760－1849）や歌川国芳（1798－1861）など、他の江戸の名絵師と共通しています。

一信は 10 年の歳月のほとんどをこれらの掛け軸の制作のみに費やしました。48 歳の時、96 番目の掛け軸を完成させた後に亡くなりました。最後の 4 幅は彼の妻の差配のもと、一信の弟子の一人によって完成され、1863 年に全 100 幅の五百羅漢図が増上寺に寄贈されました。1878 年、三門のすぐ内側に掛け軸を展示するためのお堂が建てられましたが、この建物は 1945 年の空襲で焼失しました。幸運にも、五百羅漢図は無事でした。これは、おそらく五百羅漢図が戦争中損壊を免れた経蔵に収められていたためです。

宝物展示室では、それぞれ縦 172cm、横 85cm の五百羅漢図が 10 幅ずつ、3～4 ヶ月おきに入れ替えられて展示されています。